『源氏栄鑑抄』の基礎的研究

妹尾好信
白石理穂子

【キーワード】源氏栄鑑抄、源氏物語梗概書、猪苗代正益、伊達政宗

はじめに

中世後期から近世にかけて、さまざまな『源氏物語』の梗概書が作られた。中でも『源氏小鏡』や『源氏大鏡』は広く読者に迎えられ、形態や名称を変えながら世に流布した。そんな中で、それらとは別に個性的な梗概書もいろいろ作られたのは、『小鏡』や『大鏡』に飽き足りない『源氏物語』享受者が存在したからだろう。成立事情が定かでないものが多いが、大抵は特定の個人や集団を読者に想定して作られたようである。したがって享受圏が限られ、広く世に知られることはない。今回取り上げる『源氏栄鑑抄』も作者と成立の場が明白ながら、あまり知られていない梗概書のひとつである。

一　『源氏栄鑑抄』の研究史

『源氏栄鑑抄』（「営鑑抄」とも書く）という梗概書の存在は戦前から知られていた。最も早く本書に言及したのは、藤田徳太郎著『源氏物語研究書目要覧』（昭和7年　六文館）であるようだ。同書には、「五、梗概摘要」の章に五十四件の書目を掲げる（うち十五件は近代の刊行）が、その中に、

源氏営鑑抄　一巻（写本）

篝火まで。源氏大鏡に似て更に簡単なり。（阿）

と記す。末尾の（阿）は、該本が徳島光慶図書館阿波国文庫に所蔵されていることを示す。藤田氏はおそらく同本を見られてこの項目を記されたのであろう。それによれば、書名は「源氏営鑑抄」、一冊の写本で、篝火巻までで終わっている本である。「源氏大鏡に似て」とあるのは、冒頭に「物語のおこり」に該当する記事があるからだろうと思われる。作者や成立に関する記載は一切ない。

次に、池田亀鑑編『源氏物語事典』下巻（昭和35年　東京堂出版）所収の「注釈書解題」（大津有一氏執筆）には次のようにある。

げんじえいかんしょう　源氏栄鑑抄　梗概書。

〔著者〕不詳。〔名称〕『源氏栄鑑抄』は『源氏営鑑抄』（徳島光慶図書館蔵）とも書く。しかし原題か、それとも後人の命名か明らかでない。〔巻冊〕一冊。〔成立〕不詳。〔諸本〕徳島光慶図書館蔵本が知られていたが、焼失したと思われるから、今では桃園文庫蔵本が唯一のものとなった。〔内容〕最初に『源氏大鏡』のように、この物語の起りを述べ、次に桐壺から篝火までの梗概を記している。行文は『源氏小鏡』に似て簡単である。〔価値〕『源氏大鏡』『源氏小鏡』などに比して簡単であり、かつ篝火までしかないので、あまり行われなかったらしい。伝本も少ない。〔参考〕藤田徳太郎『源氏物語研究書目要覧』六七・六八頁。

ここでは、徳島光慶図書館本が戦後まもなく起きた火災で焼失したと見られること、他に桃園文庫に一本が存在することが記される。書名が『源氏栄鑑抄』になっているのは桃園文庫本がそうある故と考えられる。冒頭に「物語のおこり」があるというのも桃園文庫本によるとおぼしく、篝火巻までの一冊本であることも桃園文庫本と『源氏物語研究書目要覧』に記す光慶図書館本の形態が一致していることを示していよう。そのため、『源氏栄鑑抄』は、桐壺巻から篝火巻までの梗概を記すのみの零本または未完成の本と見なされ、それゆえ重要視されず世に用いられなかったと説く。「行文は『源氏小鏡』に似て簡単である」というのは、梗概の記述が簡略であることと、作中和歌は主なものしか載せていないことを根拠にする説明であろう。しかし、『栄鑑抄』には『小鏡』の最大の特徴である連歌寄合の語はまったく載せないから、『小鏡』とは似て非なる梗概書である。

桃園文庫本は言うまでもなく池田亀鑑旧蔵本で、[1] 現東海大学所蔵。『桃園文庫目録　上巻』（昭和61年　東海大学附属図書館）に、

源氏栄鑑抄　写本　一冊　　桃八　五八

袋綴　紙表紙　一九×一二・六糎　七十一丁

（内容　桐壺～篝火巻）

とある本である。

さて、光慶図書館本の焼失により「桃園文庫蔵本が唯一のもの」とされた『源氏栄鑑抄』であるが、『国書総目録』第三巻（昭和40年　岩波書店）には、

源氏営鑑抄（げんじえいかんしょう）　二冊　㊀源氏栄鑑抄　類物語　著猪苗代正益　写早大・宮城伊達・桃園（一冊）・旧徳島光慶（一冊）＊梗概書

とあって、新たに早稲田大学蔵本と宮城県図書館伊達文庫蔵本の二本が掲載されている。桃園文庫本・旧徳島光慶図書館本は記されている通り一冊本なので、巻冊が「二冊」とあるのも、この新たな二本による情報なのであろう。そして、注目されるのは、著

者を「猪苗代正益」としていることである。先の『源氏物語事典』では著者不詳となっていたので、これも新たな二本による情報に違いない。そこで、宮城県図書館が出している『宮城県図書館蔵　伊達文庫目録』（昭和62年）を見ると、次のように二本が掲載されているのであった（原文横書き）。

2798　栄鑑集　D913.36-エ1
〔猪苗代正益〕著
写本
1冊　30.2cm
一名：源氏栄鑑抄
印記：伊達伯観瀾閣図書印

2799　栄鑑集　2巻　D913.36-エ1-2
〔猪苗代正益〕著
写本
2冊　26.1cm
印記：伊達伯観瀾閣図書印

これによれば、伊達文庫には「栄鑑集」なる書名の本が一冊本と二冊本の二本所蔵されていることになる。『国書総目録』はこのうちの一本を掲載していることになるが、一冊本との注記はないので、後者の二冊本のみ載せていることになる。それにしても、「栄鑑集」という別名を『国書総目録』が記していないのは不審である。『伊達文庫目録』で著者名「猪苗代正益」を〔　〕に入れているのは、該本そのものによる情報ではなく、外部資料による情報ということであろう。もしその典拠が『国書総目録』であれば、猪苗代正益説の出所は早稲田大学蔵本ということになる。

この早大本の内容について初めて言及された論考が、久下晴康（裕利）氏の「猪苗代家と源氏物語」（『中古文学論攷』第三号〈昭和57年10月　早稲田大学大学院中古文学研究会〉）である。久下氏は、「猪苗代正益の源氏物語梗概書である『源氏営鑑抄』」を猪苗代家と源氏物語の関わりを示す重要な作品と捉えてその内容を検討された。『源氏栄鑑抄』を取り上げた最初の学術論文である。論述に際して、「ここに直接用いるのは早稲田大学図書館本と『国書』には記されていない九曜文庫蔵本の二伝本で、それに未見の宮城県図書館蔵本を加えることもある」と述べられ、早大本・伊達文庫本の他に、九曜文庫蔵本の存在を報告された。そして、

三伝本はともに夢浮橋まである二冊の完本だが、九曜本は下巻の宇治十帖が天保十一年（一八四〇）の安田光則の補写となっていて、それ以前の寛政頃の写とは異なっている。

と言われ、かつて知られていた旧光慶図書館本と桃園文庫本がともに篝火巻までの一冊本であったのに対して、それら三伝本はいずれも夢浮橋巻までを備えた完本の二冊本であることを指摘された。

久下氏は早大本に、

此営鑑抄二冊猪苗代正益承貞山公命所撰述也

という奥書があることを紹介され、

『営鑑抄』の成立は、前掲奥書（貞山公が九曜本では仙台中納言、また宮城本には奥書はない）によって伊達政宗の命により猪苗代正益が撰述したことが明らかであり、その時期は十六世紀末か十七世紀初頭頃と推定される。

と述べておられる。やはり『国書総目録』の著者名記載はこの早大本の奥書によるものだったわけである。

九曜文庫本は周知のごとく中野幸一氏の蔵本で、現在は早稲田大学図書館の所蔵。最近刊行された『九曜文庫目録』（平成24年早稲田大学図書館）には、次のように記載されている。

60　源氏営鑑抄　上、下　　A四三（一・二）

猪苗代正益［著］

写、［江戸末期］

二冊　二五・七×一八・三cm

桐壺―竹河（江戸中期写）に宇治十帖（天保一一年保田光則写）を後補したもの〈印記〉岡澤蔵書、岡澤寄附、遊佐姓蔵書、鈴□□印、九曜文庫A

（上）桐壺―篝火　（下）野分―竹河、宇治十帖

九曜文庫本が早稲田大学へ移管されたのは平成二十一年のことだそうだが、それに先立って中野氏は、本書を「九曜文庫蔵源氏物語享受資料影印叢書」9『源氏営鑑抄・雲がくれ・源氏雲隠抄』（平成21年　勉誠出版）に収めて影印刊行されている。その解題によれば、九曜本は天地二巻から成るが、「地巻のうち三十九丁以降は「宇治十帖」で別筆、料紙もやや新しく後人の後補」であり、「書写年代は江戸前期、補写は奥書により天保十一年である」と言う（宇治十帖以外の部分の書写は目録の記載よりも古いとされる）。ここに言う「奥書」とは、地巻末尾に、

右此営鑑抄二巻則猪苗代氏正益承仙台中納言之命所撰述也詞簡而不遺本書大義実得源氏要領者乎　童蒙之輩欲読源氏者須先読此抄　読了而後読源氏則若披雲而観青天後学其勿外此抄

天保十一年十一月写終　　保田光則

とあるのを指し、中野氏は、「右の識語によれば、この『源氏営鑑抄』は、猪苗代正益が仙台中納言伊達政宗の命により選述したことが知られる」と述べられるが、最初の一文と同内容の奥書が早稲田大学蔵本にもあることには特に触れられていない。

ところで、九曜本の刊行よりも早く、平成十三年に出版された伊井春樹氏編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版）にも『源氏営鑑抄』は立項されており、次のように解説されている。

源氏営鑑抄　げんじえいかんしょう

〔書名〕外題、内題ともに「源氏営鑑抄」とし、巻末識語にも「此営鑑抄二巻」とするのによる。

〔著者〕猪苗代正益

〔書誌〕斎藤報恩会本は三冊、東海大学桃園文庫本は篝火巻

までの残欠本一冊。第一冊目には「源氏営鑑抄上」とし、「此物語の起り村上天皇の女御十宮大斎院より上東門院へ云々」とする起筆伝説、「紫式部」「時代」等の料簡が付され、「きりつほ」以下篝火までの梗概が記される。第二冊目の内題は「源氏営鑑抄下」として野分巻から竹河巻まで、第三冊目は「源氏営鑑抄」とあり、「宇治十帖」が展開する。巻末には、次のような識語が付される。

此営鑑抄二巻則猪苗代氏正益承仙台中納言之命所撰述也詞簡而不遺本書大義実得源氏要領者乎童蒙之輩欲読源氏者須先読此抄読了而後読源氏則若披雲而観青天後学其勿外此抄

天保十一年十一月写　保田光則

とある。

〔成立〕江戸後期

〔内容〕斎藤報恩会本は巻末に「二巻」とありながら、現存の姿は三冊本となっているのは、宇治十帖だけを別冊に仕立てたためなのか、そのあたりの事情は明らかではない。巻末の識語に記すように、前後の巻との関連や年齢、人物などを説明しながらの簡要な梗概書といえる。（以下略）

ここでは、主に斎藤報恩会蔵の三冊本に基づいて解説されているのだが、同本は第三冊末尾に九曜本と同じ天保十一年十一月の保田光則による奥書を有している。九曜本は宇治十帖の部分のみが別筆で後の補写とされていて、本来正編部分とは異なる本と見られるので、斎藤本は九曜本に補写された本の完全な姿を伝えるものと考えられる。中野氏は九曜本の宇治十帖部分を「保田光則の筆である」とされるが、もしそうであれば斎藤本は光則筆本が全巻揃っていたときの転写本ということになるが、九曜本が光則筆であるという根拠は示されていない。斎藤本は国文学研究資料館にマイクロフィルムが所蔵されており、それを見るとやはり本文的には九曜本の宇治十帖部分と極めて近いことが明らかである。

以上、現在知られている伝本は、焼失したと見られる旧徳島光慶図書館蔵本（篝火巻まで、一冊）を除いて、東海大学附属図書館桃園文庫蔵本（篝火巻まで、一冊）、早稲田大学図書館蔵本（二冊）、同九曜文庫蔵本（二冊）、宮城県図書館伊達文庫蔵本（一冊本と二冊本の二本）、斎藤報恩会蔵本（三冊）の六本ということになる。次章では、改めて各伝本について書誌的解説を加える。

（この章、妹尾）

二　『源氏栄鑑抄』の伝本書誌

現在知られている『源氏栄鑑抄』の六伝本を一通り閲覧調査することができたので、以下に各本の書誌事項をやや詳しく記す。便宜上、所蔵機関の所在地により北から順に並べて伝本番号を付す。各伝本名の下の括弧内は、私に付けた略称で、以下本稿では伝本番号を冠してこの略称を用いる。

①宮城県図書館伊達文庫蔵一冊本（伊達一冊本）

《形態》縦三〇・五cm、横二〇・九cmの大本袋綴装一冊。表紙は本文共紙で、四ッ目綴だが仮綴に近い。外題は表紙左上に「栄鑑集　全」と打ち付け書き。筆跡は本文と似通っている。内題はない。1丁表1行目より、「此物かたりのおこりは」云々と『源氏物語』の起筆伝説から記される。墨付き一七六丁。一面十一行、一行二十五字前後。下小口に「栄鑑集」とある。

《内容》物語のおこり、桐壺～夢浮橋から成る。奥書はない。和歌は改行して三～四字下げ。和歌が二行に渡る場合、歌の末は本文に続く。巻々の記事の間は基本的に一行空けられるが、桐壺・箒木・若紫・末摘花・澪標・蓬生・関屋・松風・蛍・篝火・野分の十一巻は面を改めて記事が始まる。前の巻の末尾が面の三分の二を超えて終わる場合は、次の面から新たに巻を始めているようである（ただし桐壺巻は、「物語のおこり」が3丁表の2行目で終わり3丁裏は白紙、第4丁表から書き始められている）。

《印記》「伊達文庫」「伊達伯観瀾閣図書印」[2]（巻首）

《特記事項》漢字の多くに読み仮名が振られていることが伊達一冊本の特徴と言える。他本にも振り仮名はあるが、伊達一冊本ほど多くはない。冒頭に置かれる「物語のおこり」における振り仮名の例をあげると、「女十宮大斎院（にょじうのみやおほさいゐん）」「述作（しゅつさく）」「河海（かかひ）」「説（せつ）」「八月（はつき）」等である。「物語のおこり」の叙述には多くの熟語や人名等が出てくるので、いきおい振り仮名も多くなっている。丹念に振り仮名を施すのは、この本の使用者を意識してのことか、あるいは単に親本が振り仮名の多い本であったためかは定かでないが、いずれにしろ、振り仮名を多く必要とするやや低知識の人々や若年層にもこの本が読まれたことが想像される。なお、厳密に計算したわけではないが、他伝本に比べ、全体を通して仮名書きの割合が多いように見受けられる。

②宮城県図書館伊達文庫蔵二冊本（伊達二冊本）

《形態》縦二六・二cm、横一八・五cmの大本袋綴装二冊。表紙は、無地薄桃色。見返しは白紙。表紙左上の短冊形双辺題簽に「源氏栄鑑抄　上（下）」とある。外題の筆跡は本文と同筆である。巻首に内題はないが、巻尾題を有し、「栄鑑集　上終」（上巻55丁裏）、「栄鑑集　下終」（下巻54丁裏）とある。また、下小口に、上巻は「源　栄　上」、下巻は「源　栄　下」と墨書がある。墨付き上巻五五丁、下巻五四丁。一面十三行、一行三十字前後。

《内容》上巻（物語のおこり、桐壺～藤裏葉）、下巻（若菜～夢浮橋）。和歌は改行して一～二字下げ、一行書き。本文の上部欄外に、朱筆で書き入れがある。本文の右傍に朱で圏点を施し、その言葉を上部欄外に抜き出している。抜き出されている言葉は「あるゝとも」「ねちのさふやく」「ひるま」「まし」「いまよ」「ひめもそ」の六例のみ。これらの抜き出しは箒木・夕顔両巻にのみ

見られる。また、墨と朱二種の傍書がある。

《印記》「伊達文庫」（上下巻とも1丁表）、「伊達伯観瀾閣図書印」（上巻1丁表、下巻1丁裏）。

③斎藤報恩会蔵本（斎藤本）

《形態》縦二五・九cm、横一七・三cmの大本袋綴装三冊。表紙は無地濃茶色。外題は、表紙左上に「源氏營鑑抄　上」「源氏營鑑抄　下」「宇治十帖　源氏營鑑抄」とそれぞれ打ち付け書き。内題は、巻首に「源氏営鑑抄　上」「源氏営鑑抄　下」「源氏営鑑抄／宇治十帖」（／は改行）とある。外題につく「上（下）」は表紙左上の「源氏營鑑抄」とある文字からかなり下方に離れて小さく書かれている。第三冊の外題は「宇治十帖」という文字をやや小さめに書き、「源氏營鑑抄」の文字の右肩に置く。第三冊の内題は、まず第1行目に「源氏営鑑抄」とあって、次の行に「宇治十帖」とあり、さらに行を改めて「橋姫　年二十より廿二迄」と、巻名と薫の年齢を記して宇治十帖が始まる。外題の筆跡は本文のそれと一致する。なお第三冊表紙には、右下に朱で「第八函」とある。墨付き上巻六六丁、下巻四五丁、宇治十帖巻（第三冊）四八丁。一面九行、一行二十五字前後。

《内容》上巻（物語のおこり、桐壺～篝火）、下巻（野分～竹河）、宇治十帖巻（橋姫～夢浮橋、奥書）。巻名の下には、幻巻までは、光源氏の官位と年齢、またはそのどちらかを、以降の巻は薫の年齢を記す。和歌は改行して一～二字下げ、一行書き。なお、下巻には「六条院　四町図」が挟み込まれている。[3]

《印記》「斎藤報恩會圖書印」（各冊前見返し）、「□□堂図書印」（各冊巻首、□は未判読文字）、「桑原蔵書」（各冊巻尾）。

④早稲田大学図書館蔵本（早大本）

《形態》縦二五・七cm、横一八・三cmの大本袋綴装二冊。表紙は紺地に唐草文様。見返しは白紙。表紙左上の無枠の題簽に「源氏営鑑抄　上（下）」とあり、内題は巻首に「源氏營鑑抄上（下）」とある。また、下巻106丁表最終行で夢浮橋巻が「行へのしれぬこそ面白けれ」と締められ、次の106丁裏1行目に「源氏営鑑抄終」とある。その後、一行空けて奥書が記される。上巻の題簽には、白地に紺の打ち曇りがある。外題は本文と同筆と思われる。墨付き上巻七七丁、下巻一〇六丁。一面十行、一行二十字前後。

《内容》上巻（目録、物語のおこり、桐壺～篝火）、下巻（目録、野分～夢浮橋、奥書）。和歌は改行して二字下げ、二行に渡る場合は歌の末が本文に続く。巻名の下には、幻巻までは光源氏の官位と年齢注記が付される。雲隠巻以降には注記はない。

《印記》「石澤謹吾」（各冊巻首）、「早稲田大学圖書」（各冊巻首）、「昭和十六年三月五日石澤介吉氏寄贈」（各冊巻首）。

《特記事項》六伝本のうち唯一目録を有するのが本書である。本文中の巻名と目録の巻名の表記は一致しない。たとえば、目録で

「桐壺」とあっても本文は「きりつほ」と仮名表記である。

⑤早稲田大学図書館九曜文庫蔵本（九曜本）

九曜文庫本については、影印刊行にあたって中野幸一氏が解題で書誌について述べられている。さらに昨年（平成二十四年）、「早稲田大学古典籍データーベース」[4]に『栄鑑抄』の早大本と九曜本が掲載され、インターネット上でカラーの画像を閲覧できるようになった。そこでも書誌情報が公開されており、それらを参考にさせて頂きながら、ここでは若干の補足をしたいと思う。

中野氏は解題で九曜本を以下のように紹介されている。

本書は、縦二十五・八センチ、横十八・二センチの大本袋綴装一冊、表紙は、焦茶色の野毛を散らした薄茶地に大小の水玉模様の斐紙、見返しは白紙、表紙左上の短冊形題簽に本文と同筆で「源氏営鑑抄　天（地）」とある。内題は「源氏営鑑抄上（下）」、各冊巻頭の右下に「遊佐姓蔵書」の長方黒印と「九曜文庫」の長方朱印がある。また上方に「鈴木蔵書」の陰刻朱方印、その横にも長方印があるが朱で抹消されている。

本文料紙は楮紙、墨付は天巻四十五丁、地巻七十丁、地巻のうち三十九丁以降は「宇治十帖」で別筆、料紙もやや新しく、後人の後補である。一面十三行、一行三十字前後、別筆の「宇治十帖」（三十九丁～七十丁）は一面十二行、一行十八～二十二字、歌は二、三字下げて一行書き、補筆部分の歌は二字下げで末は本文に続く。（以下略）

印記について少々付言すれば、「鈴木蔵書」の印は上巻にしかなく、「遊佐姓蔵書」印のすぐ上にある。巻首上方にある朱で抹消されている印は横に二種並べて捺されているが、判読を試みると、かろうじて右は「岡澤蔵書」、左は「岡澤寄附」と読めた。

上巻（物語のおこり、桐壺～篝火）、下巻（野分～夢浮橋、奥書）。和歌の頭には朱の合点、和歌の末にも朱点が施されている。

天・地二冊の外題の筆跡は、宇治十帖部の筆跡と同じである。宇治十帖部が後補された際に、天・地両冊の装丁を改め整えたことが推測される。九曜本の宇治十帖部（地巻39丁以降）はそれ以前とは明らかに別筆で、補写合綴本もしくは取り合わせ本と考えられる。

⑥東海大学附属図書館桃園文庫蔵本（桃園本）

《形態》縦一九・〇cm、横一二・五cmのやや縦長の中本袋綴装一冊。表紙は無地薄茶色。見返しは白紙。外題はなく、内題は巻首に「源氏栄鑑抄」とある。一面十五行、一行十九字前後。墨付き六九丁で、澪標巻と蓬生巻の間に遊紙が一丁存する。

《内容》物語のおこり、桐壺～篝火。野分以下はない。和歌は改行して二～三字下げ。二行に渡る場合も、二字下げで、本文は次の行から始まる。各巻名の上に源氏香図が記される。巻名の下に、二箇所、次のような注記がある。

・箒木「源氏十六歳桐壺と此巻の間三年あり其間藤つほと密通ありたりと思ふへし」
・空蝉「源氏十六歳」

《印記》「岡澤蔵書」「岡澤寄附」「仙臺市大□□□□物□□□取賣舎奥田商店」（すべて巻首。□は未判読文字）

《特記事項》巻首にある「岡澤蔵書」「岡澤寄附」の印は九曜本に捺されていたものと同じで、両本はかつて「岡澤」なる人物の所蔵になり、それがどこかに寄付されたという経緯があったようだ。この「岡澤」が誰なのか特定することは今のところできていない。(5)

以上、各本の書誌事項について述べた。　（この章、白石）

三　各伝本の伝来について

さて、前章に記した各伝本にある印記から知られるのは、どの本も宮城県または仙台伊達藩と関わりのある本だということである。これは、『源氏栄鑑抄』が仙台藩主伊達政宗の命によって作られたものであり、伊達家また伊達藩内で享受された作品であることから当然と言えば当然なのだが、現在は関東地方に所在する本も含めてすべての本がかつて仙台に存在していたというのは、本書の伝播範囲が極めて狭かったことの証左であろう。

伊達文庫所蔵の二本は、もともと伊達家の所蔵本であるから、伊達藩との繋がりは言うまでもない。ここでは、その他の本が有する印記に関して、その由来を可能な限り追究して報告する。

③斎藤本にある印記「□□堂図書印」「桑原蔵書」はともに蔵書主が不明であり、伝来を示す手がかりはない。しかしながら、現所蔵者の斎藤報恩会は仙台にあり、もともとは桃生（ものう）郡前谷地村（現石巻市）の大地主斎藤善右衛門が大正十二年に設立した財団法人である。主な事業は大学に対する学術研究助成と博物館の経営だが、当初に比べて現在は規模が縮小されているという。もともと文庫や図書館ではないが、博物館の収蔵品の一つに『源氏営鑑抄』があったようだ。(6) 仙台周辺に伝来した資料である可能性が高いと思われる。

次に、④早大本の印記にある「石澤謹吾」という人物は、相当な著名人である。『三百藩家臣人名事典』３（昭和63年　新人物往来社）に、

天保元年～大正六年（一八三〇～一九一七）飯田藩家老、のち典獄。（中略）幼い頃より読書を藩儒加藤一什に受け、成長して井上頤堂、大卿浩斎、昌谷精渓、藤森大雅らに学び、また洋学も修めた。安政四年父信方が没するとその家督を継ぎ、禄百石を受け、側頭取締役となり（中略）常に尊王愛国の志を抱き、開国の説を主張し、「開国即ち是勤王の道なり」と信じて疑わなかった。（中略）明治二年十月飯田藩の大参事に任ぜられ、明治八年一月警視庁十三等出仕を振り出しに官界に入り、明治三十四年十月監獄事務官に任ぜられ、高等

官三等一級棒に叙せられ、同三十五年辞職。（中略）明治の有名な典獄である。（以下略）

のごとく記されている。信州飯田の一藩士から家老にまで昇り、後に明治新政府の中央官僚になった人物である。典獄として名を挙げたこの人が『源氏物語』や日本の古典文学に特に関心があったかどうかはわからない。『栄鑑抄』そのものに興味があって所持していたというよりは、古書蒐集の趣味があって、偶然入手した書籍群の中にあったのでもあろうか。彼は、重松一義編『図鑑日本の監獄史』（昭和60年　雄山閣出版）の「宮城集治監」の章にも登場する。宮城集治監の用地は「仙台東郊、独眼竜伊達政宗隠居所若林城址南小泉村の広大な用地で用地内には政宗が朝鮮の役で持ち帰った〝臥竜梅〟もある名所である。この建築指導には警視監獄署長小野田元凞が権大警部石沢謹吾を伴って出張している」云々と書かれており、石澤は宮城集治監の建築委員にも名を連ねた。その後集治監建設の実質的責任者となり、明治十二年に落成すると初代典獄に就任したという。彼が『栄鑑抄』を手に入れたのが宮城集治監に関わって仙台との繋がりができた後なのかどうかは定かでないが、この本が仙台周辺に存在していた可能性は低くない。石澤もまた仙台という地と関わりの深い人物なのであった。(7)

そして、⑤九曜本の印記にある「遊佐姓」は伊達藩に仕えた遊佐氏の蔵書であったことを示すものであろう。遊佐氏とは、『国史大辞典』（吉川弘文館）によれば、元々は畠山氏の被官であったようだ。被官になった経緯は未詳だが、「奥州管領畠山氏の被官にも遊佐氏がおり、奥羽の遊佐氏は、のち二本松藩や仙台藩に仕えている」ということである。

また、⑥桃園本は、仙台市にあった「奥田商店」なる店が所持していたことを印記が示している。

このように、現在でも六伝本のうち半分は宮城県内にあり、関東所在の他の三本にもかつて宮城県に存在した形跡が認められるのである。このことは、『源氏栄鑑抄』が仙台で作られ、仙台とその周辺、旧伊達藩内において享受されたものであって、広く伝播することのない作品であったことを示していると思われるのである。

（この章、白石。一部妹尾加筆）

四　奥書の有無とその内容

ここで、伝本間における奥書の異同について考察しておく。六伝本のうち、③斎藤本・④早稲田本・⑤九曜本の三本は奥書を持つ。すでに先行研究から引用したものでもあるが、ここで改めて三伝本の奥書を引用する（引用文の改行は各本の通りとした）。

⑤九曜本

右此営鑑抄二巻則猪苗代氏正益承
仙臺中納言之命所撰述也詞簡而不遺本書大
義実得源氏要領者乎童蒙之輩欲讀源

氏者須先讀此抄讀了而後讀源氏則若披雲
而覩青天後学其勿外此抄
　天保十一年十一月写終　　保田光則

③斎藤本
此営鑑抄二巻則猪苗代氏正益承仙臺中納言
之命所撰述也詞簡而不遺（ママ）本書大義實得源氏
要領者乎童蒙之輩欲讀源氏者須先讀此抄讀
了而後讀源氏則若披雲而覩青天後學其勿外
此抄
　天保十一年十一月写　　保田光則

④早大本
此営鑑抄二冊猪苗代正益承
　貞山公命所撰述也

三本とも奥書は本文の筆跡（⑤九曜本にあっては「宇治十帖」部分の筆跡）と同じである。③斎藤本では、⑤九曜本のごとく「不遺」とあるべきところを「不遺」と誤写していることから、明らかに転写された奥書である。奥書に限らず、斎藤本の本文には誤写と見られる異同が目立つ。それはともかく、これらの奥書があることによって『源氏栄鑑抄』の作者が猪苗代正益であることや、伊達政宗（仙台中納言・貞山公）の命によって作られたという成立事情が知られることについては、すでに第一章で述べた通りである。

ただし、④早大本と⑤九曜本・③斎藤本の奥書の間には明らかに分量の差がある。④早大本は、『栄鑑抄』の成立事情に関する記事のみであり、⑤九曜本・③斎藤本は『栄鑑抄』の成立事情に加えて『栄鑑抄』の意義についても述べている。そして天保十一年十一月に保田光則が書写したとする年時記載と署名がある。奥書の量に差があることには、増補されたか削除されたかの二方向の可能性があるわけだが、すでにあった奥書の記載を書写者が削除または省略するという可能性は低いように思われる。したがって、保田光則は④早大本のごとく成立事情のみが簡潔に記された奥書を持つ『源氏営鑑抄』を見る機会を得て、その本を親本として天保十一年十一月に書写した際に、この作品の意義についての自らの見解を奥書に加筆したのであろうと思う。もっとも、光則が見た本にすでに⑤九曜本・③斎藤本のような量の多い奥書があり、それを写した後に書写年時と署名を加えたと考えられなくもないが、おそらくその可能性は低いであろう。

ところで、奥書を持つのはこの三本だけである。作品の成立事情を伝える奥書のない伝本があり、しかもそれが成立に深く関わった伊達家の蔵書だということから考えると、正益自筆の原本には奥書はなかったのであろう。転写にあたって成立事情に関する奥書をわざわざ削除するというのは不自然だからである。

そして、⑤九曜本・③斎藤本では「二巻」、④早稲田本では「二冊」とあるように、『栄鑑抄』は二巻二冊の形態であったようだ。

ただし、これは最初に奥書を書いた書写者が見たのが二冊本であったということで、作者正益が『栄鑑抄』を何冊仕立てで書いたのかは別問題である。実は、現存伝本を子細に調べてみると、現存本以前におそらくは七冊本の形態であったのではないかと推測される節があるのである。

現存本のうち二冊本の形態を持つのは②伊達二冊本・⑤九曜本・④早大本の三本である。分冊にしない①伊達一冊本を除いた五本のうち四本は、第一冊に篝火巻までが収められている（焼失したとされる徳島光慶図書館蔵本も篝火巻までの一冊本であったようだ）。しかし②伊達二冊本だけは第一冊に藤裏葉巻までを収める。②伊達二冊本には篝火巻の後に野分・行幸・藤袴・真木柱・藤裏葉の五巻が収められていることになる。②伊達二冊本は上巻五五丁、下巻五四丁と上下巻の分量がほぼ等しい。それに比べて、篝火巻を第一冊の巻末にする伝本では、上下巻の丁数の差は、⑤九曜本では二九丁、④早大本では二五丁である。三冊本である③斎藤本も第一冊は篝火巻までとなっている。上巻と下巻の差は二一丁、上巻と第三冊目の宇治十帖巻の差は一八丁であった。二冊本ならば上下巻で量的にもバランスの取れた②伊達二冊本のような形がふさわしいように思う。たかが数十丁のこととはいえ、藩主であり庇護者である伊達政宗に献上するものであれば、正益は体裁にも細かく心を配って作ったはずだ。物語の構成を考えた上での分冊なら、なおさら光源氏が准太上天皇になって栄華を極める藤裏葉巻を一冊の句切りとした方がよかったはずである。ではなぜ、現存伝本の多くが篝火巻を第一冊の末尾に置いて、上下巻のバランスを失った形になっているのだろうか。以下はその理由の臆測である。

篝火巻が分冊の区切れになっているのは、もともとの形態の名残を留めたものなのではないか。すなわち、本来七冊に分冊されていた親本を、上下二冊本に仕立て直したために生じた不均衡ではないかと思うのである。親本の段階では一冊一冊の分量が同じ程度であっても、奇数の冊数の本を二冊にまとめた場合、どうしても上下巻で差が出てしまう。上下冊に二五～三〇丁の差があるということは、もとの一冊分もそのくらいの分量だったということではないだろうか。

このような推測のもと、『源氏栄鑑抄』の七冊本を想定してみる。第一冊が桐壺～紅葉賀巻、第二冊が花宴～関屋巻、第三冊が絵合～篝火巻、第四冊が野分～若菜下巻、第五冊が柏木～竹河巻、第六冊が橋姫～東屋巻、第七冊が浮舟～夢浮橋巻。このように分冊されていたと仮定すれば、篝火巻が現存伝本の第一冊の最後になっているのも、冊数が多くあったころの名残で、七冊本のうち前三冊と後四冊がまとめられたために、上下巻で分量的にアンバランスな本となったと推測されるのである。この場合、一冊の分量が二五丁～二七丁（便宜上、④早大本の丁数をもとに計算した）になる。だから正益が政宗に献上した本は七冊本だったと

結論することまではできないが、『栄鑑抄』は伝来過程のある段階で七冊本であったのではないかという推測は成り立つと思うのである。

それでは、伊達文庫に残る二つの伝本が、一冊本と、上下巻で量的に均衡の取れた二冊本であることはどのように説明されるだろうか。書写者はおそらくもとの本をできるだけそのままの形態で写そうとするであろうが、著者である正益ならばどうだろうか。正益であれば、増補・改変を加え、用途に合わせて改編するに当たって、もともとの巻の切れ目などはあまり気にせず、上下巻で分量的にバランスの取れた形に改めることもなし得よう。その際、藤裏葉巻を分冊の区切れとする方が物語の構造上ふさわしいと考え直したかもしれない。伊達文庫に収められている本だけがこのような分冊形態になっているということは、正益自身の手か、もしくはその助言によって二冊本に仕立て直したというような事情があって、現存の②伊達二冊本はそれを継承した形態なのかも知れないと思う。

ところで、⑤九曜本と③斎藤本の奥書に署名している保田光則という人物について述べておく必要があるだろう。保田光則の経歴に関しては青山英正氏「仙台の和学者・保田光則の文業―和歌と教化活動を中心に」（『言語情報科学』第五号　平成19年）に詳しい。以下は同論文を参考にしつつ記述する。

保田光則なる人物は、寛政九年（一七九七）に仙台藩の中堅藩士・保田光利の次男として生まれた。彼は『雅言集覧増補并続編』の著者として今に名を残すが、藩士として藩の文教政策に力を尽くしたようで、文政三年（一八二〇）三月には藩の学び舎である養賢堂の権諸生主立、同九月に権諸生扱に昇進し、一教員の職についている。文政十年（一八二七）には『訓戒和歌集』と題する歌集を編纂している。この集は「『万葉集』や勅撰集の古歌から当代の道歌までを七〇〇首以上集め、教訓のために用いた歌集」であるという。その特徴は「読者像が男性に設定されていた」点であるとされる。光則の孫・孝太郎氏によれば「藩学指南役兼藩主慶邦公の師範役に挙られたり」ということもあったようである。[8] また、星加宗一氏は、光則は猪苗代謙道ともよく交流があったであろうと言われている。[9] 謙道は甥兼与の養子となって猪苗代家嫡流を嗣いだ正益の子兼説の八代目の子孫である。光則が『栄鑑抄』を目にしてその意義を強調して書写したのも、猪苗代家の人物と繋がりがあったからかも知れない。

それにしても、中堅藩士である光則が目にすることができたということは、『栄鑑抄』は政宗の命を受け撰述された後、伊達家の筐底に秘め置かれていたわけではなく、藩内に広がることを許された書物であったようだ。和歌が教育的有用性を持つと主張する光則にとって『栄鑑抄』はいかなる価値があったのだろうか。朱子学中心の養賢堂で、国学者として和歌や和文の有用性を主張しなければならない彼にとって、『源氏物語』の教訓的要素を直接

指摘している『栄鑑抄』はなかなか有用だったことと思われる。

光則が書写年時と署名に留まらず、自らの見解を述べた奥書を加えたのにはどのような背景があったのだろうか。奥書の文言を見る限り、『栄鑑抄』を高く評価し、この書がより多くの人に読まれることを推奨している。それは光則が藩校で指導者的立場にあったことと関係があるのではなかろうか。彼が奥書の中で本書の有用性を強く主張したのは、養賢堂で講読することを想定してのことと考えるのもあながち無理ではないだろう。養賢堂の中で奥書に言うような「童蒙之輩欲讀源氏」ということが実際にあったからこそ、光則はこの書に着目し、自ら書写したのではなかろうか。

前述のごとく、伊達家伝来本には奥書がないことから、作者正益は『栄鑑抄』に自らの奥書や識語を付さなかったようだが、伊達政宗の周辺からこの作品が転写されて地道に広がっていく中で、まず本書の成立事情が記され（④早大本奥書）、後に保田光則によって本書の有用性について述べた文章が追加されたという奥書成長の経緯が推測されるのである。

正益が奥書を付さなかったのは、この書が世間に広く流布して不特定多数の読者に読まれるということを想定していなかったためかも知れない。政宗がどのような目的で正益に『源氏物語』梗概書の製作を所望したのか定かではないが、正益は伊達家内のごく少数の人々に読まれることを念頭に執筆したのではないかと思う。つまり政宗をはじめ『栄鑑抄』の成立事情をよく知る人々を読者に想定していたからこそ、奥書を付す必要性を感じなかったのだと考えられるのである。

『栄鑑抄』は写本のみで伝わり、現存伝本の数も多くはないが、それは梗概書としての価値が高く評価されなかったからというわけではなく、もともと伊達家とその周辺において享受するために作られたので、多くの人にその存在が認知されなかったためであると考えられる。成立から二百年ほど経った江戸後期に、藩内で和歌の指南役として活躍していた保田光則によってその価値が見出され書写されたことにより、伝本は多少増えたけれども、広く流布することはなく今日に至っている。光則が強調した通りの価値を有する作品であるかどうかは、今後の研究にゆだねられることになるだろう。

（この章、白石）

五　諸伝本における和歌注の異同について

『源氏栄鑑抄』の現存六伝本には、奥書の有無や分冊形態の相違のみならず、本文に関しても相互に大小の異同がある。それらのいちいちを細かく検討することは紙数の制約もあってできないので別稿に譲り、ここでは和歌注、すなわち作中に引用された和歌に対する読解注の有無に観点をしぼって略述することにする。

『栄鑑抄』には『源氏物語』原典に存する七九五首のうち二〇六首の和歌が引用される。これは一部の脱落と見られる箇所

を除き、基本的に諸本間に異同はない。

最も和歌注の多い①伊達一冊本は、二〇六首の引用歌のうち一九八首に、長短はあれ何かしらの和歌注を付している。

②伊達二冊本では、箒木巻で、「は、木きの」[10]の歌を落とす。本来は和歌注として、「は、木きの」の後に「そのはらや」の歌が本歌として紹介されるのだが、同本は光源氏詠として「そのはらや」を挙げる。「は、木きの」を落とすと同時に、和歌注の一文「あひかたき人は心をはしらてあやなくたつねまとふといふ心か」も②伊達二冊本には見られない。「は、木きの」の歌は誤って脱落したと見るのが自然だが、その後の和歌注の一文がないのはいかなる理由だろうか。おそらく親本にはこの一文がなく、本歌「そのはらや」を指摘するだけだったのだろう。すると、この和歌注部分には現存伝本で三様の本文があることになる。和歌注のない③斎藤本・④早稲田本、本歌指摘のみの②伊達二冊本、本歌指摘と和歌注一文を持つ①伊達一冊本・⑤九曜本・⑥桃園本の三種である。これは、段階的に和歌注が増えていった状況を反映しているのであろう。

さらに②伊達二冊本には夕霧巻に和歌を含む脱落がある。「山さとの」（五二六）の和歌が落ちているのであるが、和歌注があったかどうかは確かめられない。これら二箇所の脱落箇所を除けば、①伊達一冊本と②伊達二冊本で和歌注の量は一致している。

④早大本において和歌注があるのは、二〇六首のうち一二三首である。④早大本と①伊達一冊本の和歌注を比較すると、一二三首のうち二七首の和歌注で④早大本の方が記述量が少なくなっている。

③斎藤本は、須磨巻に大きな脱落が見られ、「うら人の」「うきめかる」「恋わひて」の三首と「山かつの」の歌の第三句目までを含む本文を落とす。それ以外の和歌注の有無に関しては④早大本と一致するが、④早大本よりも和歌注の分量が多い例が一首ある。伊達文庫二本で竹河巻の「竹河の」の歌には二文の和歌注があり、③斎藤本には二文ともあるが、④早大本ではうち一文がないのである。

⑥桃園本は上巻のみしか存しないが、上巻（桐壺～篝火巻）の引用和歌九七首のうちすべてに和歌注がある。これは①伊達一冊本と一致している上、注の分量も等しい。

⑤九曜本は宇治十帖部が正編部とは別筆であることをすでに述べた。桐壺～竹河巻については、引用和歌一五九首のうち一五三首に和歌注があり、これは①伊達一冊本と一致している。しかし和歌注の量に関しては一箇所相違がある。箒木巻の「数ならぬ」の歌の和歌注の中の一文が⑤九曜本には見られないのである。

宇治十帖部における和歌注を諸本比較してみると、③斎藤本・④早大本には①伊達一冊本に比して和歌注の量が少ない例がいくつもある。注目すべきは、宇治十帖部における⑤九曜本の和歌注の量が③斎藤本・④早大本と一致することである。⑤九曜本は正

編部においては①伊達一冊本と和歌注の量がほぼ等しいのに、宇治十帖部では和歌注の少ない③斎藤本・④早大本に一致するのである。

『源氏栄鑑抄』の現存伝本には、和歌注の多い伝本＝①伊達一冊本・②伊達二冊本・⑤九曜本（桐壺～竹河巻）・⑥桃園本と、和歌注の少ない伝本＝③斎藤本・④早大本・⑤九曜本（宇治十帖部）との二類があることになる。細かく見れば各類の中にも和歌注の量に異同が見られるのだが、それも含めて、やはり和歌注が段階的に増補されていった状況を示しているのではないかと思われる。

伊達文庫の二本はとりわけ和歌注を付けることにこだわっている。それはこの二伝本にのみ「聞こえたるまま也」というような、歌意明快で注が不要であることを示す注が見られることからもわかる。それ自体が不要に見える注であるが、和歌について何かしら言わねばならぬという意識の表れであろうか。

⑤九曜本は桐壺～竹河巻が和歌注の多い本により、宇治十帖部は和歌注の少ない本に拠っている。このように性格の違う二類の本から成る⑤九曜本は、やはり補写合綴本もしくは取り合わせ本と考えられよう。宇治十帖部の本文と上下二冊の外題の筆跡が同じであることから、和歌注の多い正編部（桐壺～竹河巻）のみで宇治十帖部を欠いた本の所持者に、宇治十帖部を備えた本（それは和歌注の少ない本であった）を見る機会が巡ってきたので、宇治十帖部を書写して補い、同時に全体の装丁を改めて二冊本に整えたのであろうか。あるいは、はじめ和歌注の少ない完本を所持していたが、何らかの理由で正編部を失い、後に入手した正編部（和歌注の多い本）でその欠損を補ったとも考えられよう。前者であれば補写合綴本、後者ならば取り合わせ本ということになるが、どちらかは不明である。

和歌注の多寡が生じた理由については、不要な注が削減されたと考えるよりも、必要に応じて和歌注が増補されたと考えるほうが妥当だろう。そして、その和歌注の増補は誰によってなされたのかと言えば、作者正益自身がなしたのではないかと思う。

もし書写されていく過程で和歌注が増やされていったのならば、伊達文庫に収められている二伝本に和歌注が多いことに違和感を覚える。たとえ書写者が和歌に造詣が深かったにしても、安易に他人の著書に手を加えるということはしないであろう。伊達家に献じられた正益作の『栄鑑抄』が藩内の人々の手で転写中に増補され、その増補された二本が伊達文庫に収められたというよりも、一旦の完成を見て献上された後も、正益は和歌注を増補した改訂版を作り続け、その改訂本が伊達家に残されたと考える方が自然ではなかろうか。和歌注の多い増補改訂版だけが伊達文庫に収められていることから、あるいは和歌注の少ない本は『栄鑑抄』の草稿本とも呼ぶことができるかもしれない。和歌注の増補が伊達政宗からの指示であったのか、正益自身がより有用な書

を目指して行ったのかは定かでないが、和歌注の増補は『源氏物語』の作中歌の内容をも読者に理解させようとする点で『栄鑑抄』の梗概書としての性格付けを強化するものである。この増補は、『源氏小鏡』などが世に流布する中、新たに作られた梗概書として『栄鑑抄』の付加価値をより高めるためになされた行為であろうと思うのである。

（この章、白石）

おわりに　―二つの書名『栄鑑抄』と『営鑑抄』

和歌注の増補という観点から、現存六伝本を和歌注の少ない第一次本と和歌注の多い第二次本の二類に分けることができることを前章で確認した。すなわち、六伝本は次のように分けられる。

・第一次本―③斎藤本・④早大本・⑤九曜本（宇治十帖部）
・第二次本―①伊達一冊本・②伊達二冊本・⑤九曜本（桐壺～竹河巻）・⑥桃園本

ここで気がつくのは、第一次本のうち③斎藤本・④早大本は外題・内題とも「源氏営鑑抄」とあり、第二次本は、①伊達一冊本は外題「栄鑑集」、②伊達二冊本は外題「源氏栄鑑抄」・巻尾題「栄鑑集」、⑥桃園本は外題「源氏栄鑑抄」（内題なし）とあることである。これだけ見ると、第一次本の書名は「源氏営鑑抄」、第二次本は「源氏栄鑑抄」あるいは「栄鑑集」と区別されるように思われる。ところが、⑤九曜本は、上下巻いずれも外題・内題とも「源氏営鑑抄」とある。前述の通り上下巻の外題は宇治十帖の本文・奥書の筆跡に酷似するので、外題は第一次本である宇治十帖部の書名表記に倣ったとも考えられるのだが、上下巻の巻首にある内題は第二次本である正編部の筆跡に等しいので、正編部も「源氏営鑑抄」の書名を有していたと思しい。⑤九曜本正編部は第二次本で唯一「営鑑抄」と表記する本ということになる。それにしても、どうやら、「栄鑑抄」「営鑑抄」二通りの書名表記を持つ本書は、基本的に第一次本は「栄鑑抄」、増補本の第二次本は「営鑑抄」の書名表記であったと考えられそうなのである。⑤九曜本は、「営鑑抄」から「栄鑑抄」（あるいは「栄鑑集」）へと書名表記が変わる過渡期に書写された本と言うべきであろうか。

ところで、「営鑑抄」であれ「栄鑑抄」であれ、「営鑑」「栄鑑」とはいかなる意味の語なのだろうか。両語は『日本国語大辞典〔第二版〕』や『大漢和辞典』語彙索引などにも見えず、特に由緒由来のある一般名詞ではなさそうだ。すると固有名詞としか思えず、そうなると第一に考えられるのは著者猪苗代正益の号ではないかということである。正益についてはほとんど伝記が明らかになっておらず、連歌師・文人としての号もよく知られていない。[11] しかしながら、兄の兼如についてはやや研究が進んでいて、是斎・意伯などの他に「重鑑」とも号したことが知られている（金子金治郎著『連歌師と紀行』〈平成2年　桜楓社〉、綿抜豊昭著『近世前期猪苗代家の研究』〈平成10年　新典社〉）。兄兼如の号「重鑑」に倣い、その一字「鑑」を取って正益が「営鑑」また「栄鑑」と

号したとしても不思議はない。ことによると、第一次本を著した頃は「営鑑」と号し、第二次本に改訂する頃には「栄鑑」と号していたため、二様の書名がほぼ使い分けられているのかも知れないと思う。まったくの臆測ではあるが、ひとつの仮説として提示しておく。

本稿では、ほぼ書誌的事項に限って扱い、『源氏栄鑑抄』の内容的考察にまでは至らなかった。それについては別稿を期したい。

（この章、妹尾）

〔注〕

（1）池田博士がこの本をいつ誰から入手したかは明らかでない。昭和七年（一九三二）十一月に東京帝国大学で開催された『源氏物語』に関する大規模な展覧会には、池田博士が蒐集された多数の書物が展示されたが、その目録『源氏物語に関する展観書目録』（東京帝国大学文学部　国文学研究室編）には、「梗概書」の項目下に五十六点の書目が並ぶものの『源氏栄鑑抄』の名は見えない（伊藤鉄也編『もっと知りたい　池田亀鑑と「源氏物語」～第2集～』〈平成25年　新典社〉所収の復刻による）。この時以後に入手されたものか。

（2）『宮城県図書館だより「ことばのうみ」』第26号によれば、伊達文庫は、歴代仙台藩主であった伊達家の蔵書や藩政史料で構成されており、昭和二十四年（一九四九）、宮城県図書館が伊達家の旧蔵書を購入し、「伊達文庫」という名を冠して収蔵し、現在に至るそうだ。印記の「伊達文庫」印もその際に捺されたものであろう。また、「伊達伯観瀾閣図書印」について、同誌の記述を以下に引用する。

伊達文庫の資料には数種類の蔵書印が押印されており、収蔵時期や所蔵者を探る手掛かりとなります。伊達文庫蔵書の多くには、「伊達伯観瀾閣図書印」という正方形の朱印があります。「伊達伯」とは伊達家の総本家の意、また「観瀾閣」とは伊達家の堂号のことで、伊達家から仙台文庫会への（ママ）寄託した際の伊達家の所蔵を示すための押印だったようです。他には、第5代藩主吉村の蔵書印「壁」、漢籍の一部にみられる「伊達氏伯家蔵宝書」、仙台文庫会に寄託した際に、仙台文庫会が押印した「仙台文庫」があります。よって『栄鑑抄』は伊達家から一度仙台文庫会へ寄託された経歴を持つ本であることがわかる。

（3）「六条院　四町図」には、「をさな源氏ニ出」との注記が見られる。『おさな源氏』の巻三十四にある六条院図をもとにした図なのであろう。

（4）「早稲田大学古典籍データベース」（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）なお、本書は「源氏営鑑抄」という書名で登録されている。

（5）渡辺守邦・後藤謙二編「日本書誌学大系79」『新編蔵書印譜』

（平成13年　青裳堂書店）には、岡沢稲里の蔵書印として「岡澤蔵書」印を掲載するが、印影は全く異なっている。

（6）国文学研究資料館は斎藤報恩会所蔵の古典籍を約三百点調査し、マイクロフィルム化して閲覧に供している。

（7）昭和十六年（一九四一）に早稲田大学へ『源氏営鑑抄』を寄贈した石澤介吉なる人物は、謹吾の子孫であろう。介吉氏は石澤謹吾旧蔵書を多数寄贈しており、「早稲田大学古典籍データベース」には『源氏営鑑抄』を含め三十点が掲載されている。その中には、『源三位頼政家集』『清輔袋草紙』『徒然草』などの文学書も含まれており、仙台や東北関係の書も目につく。

（8）「保田光則伝記資料」（『言語学雑誌』第一巻第七号　明治33年8月）に孫の孝太郎氏が文章を寄稿しているが、他は編者が光則についての聞書をまとめて「保田光則伝記資料」としてまとめている。

（9）星加宗一「仙台に於ける国学の大家　保田光則につきて」（『宮城教育』385号　昭和6年7月）。星加氏は、光則と同じく河田了我に師事した斎藤永配という人物が猪苗代謙道と交流が深かったことから、保田光則と謙道の間にも交流があっただろうと推測されている。永配の著した『梅翁日記』に、謙道と永配との交流が度々記されているということである。

（10）以下、『栄鑑抄』本文の引用は①伊達一冊本による。

（11）東山御文庫蔵『伊勢物語聞書』の奥書に「栗種斎　正益」と署名があることから、「栗種斎」の号が知られている。

〔付記〕本稿は、平成二十四年度に白石が広島大学大学院文学研究科に提出した修士論文「『源氏栄鑑抄』研究」の一部に、妹尾が大幅に加筆して成稿としたものである。諸伝本調査の際に便宜を図って下さった各所蔵機関の方々に記して御礼申し上げます。

なお、本稿は、妹尾が参加する国文学研究資料館の基幹研究「日本文学における〈中央〉と〈地方〉」による研究成果の一部でもあります。

A Fundamental Research on *Genji-eikansho*

Yoshinobu SENO, Rihoko SHIRAISHI

Genji-Eikansho is a synopsis of Genji-monogatari. It was written by Shoeki Inawashiro under the order from Masamune Date. As was not widely known due to being read among the Date family, this work has been less well understood. This paper examines fundamental aspects of the text, by focusing on bibliographical parts.